

文学を通して育成される英語リーディング力とは

— 新高等学校学習指導要領とコミュニケーション能力論を踏まえて —

小 野 章

広島大学大学院教育学研究科

第1節 はじめに

平成24年10月27日（土）・28日（日）、高知大学朝倉キャンパスにて、日本英文学会中国四国支部第65回大会が開催された。大会2日目の28日には、「英語リーディング教授法の多様化のなかで—文学研究者に存在意味はあるのか」というテーマのシンポジウムが開催された。同シンポジウムに筆者は講師のひとりとして参加し、約20分間の講演（演題：「文学教材によってこそ育まれるリーディング能力って何だろう？」）を行った。本論は、その際に話した内容に基づいている。

同シンポジウムは、そのテーマが示す通り、英語文学を主な専門とする研究者が、英語リーディングの授業をいかに展開し得るかを考えるものであった。想定された英語学習者は、日本の大学の教養課程で英語を学んでいる、特に文学を専門とはしない学部1、2年生であった。従って本論も、このような学習者に求められるリーディング力と文学との関わりについて考察する。

本論での「文学」には、シェイクスピアやディケンズといったいわゆる canon はもとより、『ハリー・ポッター』や『ピーター・ラビット』やその他「お話」までも広く含まれると理解された。逆に、文学に含まれないものとしては、ネコの習性を説明したような説明文や、エネルギー問題を論じたような論説文や、広告や取扱い説明書における文章等を想定している。また、いわゆる4技能のうち、リーディング（読解）を本論では扱う。

第2節 英語教育の手段としての文学

昨今の実践的英語コミュニケーション能力重視の中で、文学は英語教材として不人気であり、検定教科書においても文学を元にしたレッスンは減少の一途をたどっている（江利川、1998；2004）。その一方で、文学に対して肯定的な意見を持つ英語教員が存在するのも事実である。例えば、小澤・幡山（2010）が行ったアンケート調査において、4件法によるアンケート項目「中学校・高等学校の英語の授業で「文学的教材」を扱うことは大切だと思いますか」に対し、肯定的な回答（「強くそう思う」か「そう思う」）を寄せた中学校教員（全45名中）、高等学校教員（全28名中）はそれぞれ87%、82%だった。

本論は、英語教材として文学を活用することを考察するものである。しかし、「はじめに文学ありき」を主張し、文学を英語教育に取り入れることを前提とするものでは決してない。あくまでも英語教育を起点とした上で、英語教育に文学が本当に必要かどうかを考えたい。つまり、英語教育において、文学は目的ではなく手段に過ぎないというスタンスを本論は取る。換言すると、日本人英語学習者が求めるべき英語力を特定した上で、その英語力向上の手段に文学はなり得るかを考察したい。

学習指導要領の冒頭にはまず「目標」が書かれているように、英語教育は通常、目的論からスタートする¹⁾。目的を定めた上で、その目的を達成するための教材、教授法を考えていく。英語教育の目的は、言うまでもなく学習者に英語力を付けさせることである。英語力の中でも本論は

読解力を扱うものであるが、読解力は様々な要素から成り立っていると考えられる²⁾。例えば Brown (1994) は、ESL 学習者が優れた英語の読み手となるためには、計14の「リーディング力を構成する下位能力」(microskills for reading comprehension) を磨く必要があると指摘した³⁾。紙幅の都合上それら全てを引用することは控えるが、14の下位能力中、文学のリーディングのみに必要となる能力はひとつもない。例えば、13番目に挙げられている「文化的に特異な記述を見つけ、それを適切な文化的背景知識に照らし合わせながら解釈する」(13. Detect culturally specific references and interpret them in a context of the appropriate cultural schemata.) という能力がある。例えば、カズオ・イシグロの *The Remains of the Day* を読む際には、英国貴族やそのもとで働く「執事」(butler) 等に関する最低限の「文化的背景知識」が確かに必要となるが、それは、英国貴族や執事に関するより一般的な説明文を読む際にも言えることである。逆に、14の下位能力中、文学のリーディングに無関係な能力もひとつとしてない。例えば、6番目の「文法型の違いによって、特定の意味が表現され得ることを理解する」(6. Recognize that a particular meaning may be expressed in different grammatical forms.) という能力がある。これは、例えば、似たような内容をもつ英文でも、能動態であるか、受動態であるかによって意味が異なることを理解するような能力であろう。このような能力は、論説文や説明文等を読む際にも、文学を読む際にも等しく求められる。

Brown (1994) が挙げたリーディング力の14の読解下位能力中、文学のリーディングのみに必要となるものはひとつもない。逆に、文学のリーディングに無関係な能力もひとつとしてない。換言すれば、14の下位能力を磨くために、文学を教材としても、文学ではないものを教材としても良いということになる。しかし、これら下位能力の中で、特に文学によって効果的に育まれるものがあるのではないか。そして、もしそのような能力があるとすれば、次のように考えることが出来よう。つまり、「14の下位能力のうち、○の能力と△の能力は、文学以外のテキストによっても育まれるが、文学テキストによってこそ効果的に育まれる。それならば、○と△の能力の向上に関しては、文学を教材とするのが望ましい」と。では、文学との相性が比較的良好な読解下位能力は果たして何であろうか。それを考えるにあたって、大きく2つのものを参考にしたい。ひとつは学習指導要領で、もうひとつはより一般的なコミュニケーション能力論である。

第3節 新高等学校学習指導要領が規定するリーディング力と文学

本論が想定する英語学習者は、日本の大学の教養課程で英語を学んでいる、特に文学を専門とはしない学部1、2年生である。大学に入ったばかりの彼／彼女たちが、高校卒業時まで求められていた読解力をまずは確認しておきたい。

第1項 新高等学校学習指導要領の概要

平成25年度から実施される新高等学校学習指導要領(以下、新指導要領)において、特に読むことに関し何が求められているのかを確認しておく。新指導要領では、外国語科に属する英語は「コミュニケーション英語基礎」「コミュニケーション英語Ⅰ」「コミュニケーション英語Ⅱ」「コミュニケーション英語Ⅲ」「英語表現Ⅰ」「英語表現Ⅱ」「英語会話」の計7科目から構成されている。うち、「コミュニケーション英語Ⅰ」(以下、「コミⅠ」)は、英語を履修する場合の唯一の必修科目である。また、ほとんどの高校が「コミュニケーション英語Ⅱ」(以下、「コミⅡ」)を教えると考えられる(「コミⅡ」は選択科目であり、「コミⅠ」を履修した後に履修出来る)。従っ

て、本論では「コミⅠ」と「コミⅡ」の2科目のみを取り上げる。

なお、外国語科ではなく英語科に属する英語については、英語科が設置されている高等学校の数が少ないという理由から、本論では扱わない。

第2項 「コミュニケーションⅠ」が規定するリーディング力と文学

「コミⅠ」では、扱うべき言語活動としてア～エまで技能別に計4点が挙げられている。うち、「読むこと」に関わるイのみ、『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』（以下、『解説』）から引用する。

イ 説明や物語などを読んで、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりする。また、聞き手に伝わるように音読する。

これは、読むことを中心とした活動である。

「説明」は、幅広い話題について、主に事実に基づいて書かれた文章を意味している。このため、概要や要点をとらえる際は、特に重要な事実等をとらえることを通じ、全体の要旨を理解することが重要となる。

「物語」は、一定の筋をもった文章である。このため、概要や要点をとらえる際は、登場人物の言動やその理由等を文章に即してとらえることが重要である。加えて、単なる文章理解にとどまらず、物語を読むことは、実生活では体験できないような新しい世界に触れたり、我が国や外国の文化等の理解を深めたりすることに資するものであることにも配慮し、物語を読む楽しさについても体験的に理解させることが重要である。

(以下略)

「コミⅠ」では、読むべきものとして説明と物語が挙げられている。文学に関係するのは当然、後者の物語である⁴⁾。その物語を読む際には、大きく次のふたつが留意点として挙げられている：(1) 物語は「一定の筋をもった文章」であるため、「概要や要点をとらえる際は、登場人物の言動やその理由等を文章に即してとらえること」；(2) 「物語を読む楽しさについても体験的に理解」すること。つまり、この2点が、物語／文学による育成が期待される能力となろう。同様に、「コミⅡ」に関する次項では、文学による育成が期待されている能力をさらに2点挙げる。

第3項 「コミュニケーションⅡ」が規定するリーディング力と文学

「コミⅠ」と同様に、「コミⅡ」においても、扱うべき言語活動は、ア～エまで技能別に計4点が挙げられており、イが「読むこと」に関わる。イとその解説を引用する。

イ 説明、評論、物語、随筆などについて、速読したり精読したりするなど目的に応じた読み方をする。また、聞き手に伝わるように音読や暗唱を行う。

これは、読むことを中心とした活動であり、「コミュニケーション英語Ⅰ」の2の(1)のイに挙げられている題材に、「評論」及び「随筆」が加わっている。

「評論」は、「説明」と比べ、事実に基づき、書き手の意見が述べられることが増えること

になる。また、「随筆」としては、いわゆるエッセイが想定されており、しばしば個人的な経験に関する記述を含む。このため、概要や要点をとらえるに当たっては、評論や随筆に含まれる事実や書き手の意見を正確にとらえるだけでなく、それらの事実や意見を踏まえて自らがどう考えるか、書き手の意見は事実を踏まえると妥当であるかまで含めて、総合的にとらえることが必要となる。

「速読」とは、概要や要点を把握したり、必要な情報や考えなどを探したりするときのように、細部に拘泥せずに読み進めていく読み方のことである。

「精読」とは、詳細を理解したり、文章の良さを味わって読んだり、書かれている情報や考えなどを自分の考えなどと対比させながら読み進めていったりする読み方のことである。

「目的に応じた読み方をする」とは、英文を読むときに、生徒自身が何のために読むのかをあらかじめ明らかにし、それに応じた読み方として速読や精読などの読み方を選択する必要があることを示している。目的には、例えば、概要や要点を把握する、必要な情報を探す、詳細を理解する、文章を解釈するなどがある。生徒の実態に応じて段階的に進めていくことが必要であるが、少なくとも初期の段階では教師が目的を設定し、それに応じた読み方を指導する必要がある。

「暗唱」とは、英文を単に暗記するだけでなく、暗記した英文の意味や書き手の意図などを理解した上で、リズムやイントネーションなどの英語の音声的な特徴などに注意しながら、書き手の伝えたいことが相手に伝わるように音声表現することである。

「コミⅡ」では、「コミⅠ」の説明と物語に加え、評論と随筆も読むべきものとして挙げられている。文学に関係するのは、先に触れた物語と随筆であろう。随筆を読む際には、次のことが留意点として挙げられている：(3)「書き手の意見を正確にとらえ」た上で、読者「自らがどう考えるか」を明らかにすること。

速読と精読のどちらが、説明、評論、物語、随筆に適しているかといった記述は見られない。テキストの種類ではなく、目的に応じて、速読と精読を使い分けることが求められている。例えば、ひとつの物語を読む際も、速読を通して「概要や要点を把握」した上で、精読を通して「文章の良さを味わって」読むことや「文章を解釈する」ことが考えられる。

文学には、感情の起伏に関わる描写や会話が少なくない。従って、次の能力は文学を通しての育成が期待されよう：(4)暗唱では、「書き手の伝えたいことが相手に伝わるように音声表現すること」。

第4項 文学によって育まれるべきリーディング力—新指導要領の観点から—

第2,3項では、新指導要領の「コミⅠ」と「コミⅡ」で求められるリーディング力のうち、文学に関わると考えられる4つの能力に触れた。それらの能力を、若干文言を修正しながらまとめたものが以下である。

- (1) 物語などを読むことを通して、登場人物の言動やその理由等を文脈に即してとらえる。
- (2) 物語などを読むことを通して、読む楽しさを体験する。
- (3) 随筆などを読むことを通して、書き手の経験や意見を、読み手自身のものと照らし合わせる。

(4) 音読や暗唱を通して、文章に込められた意味が相手に伝わるように音声表現する。

* 読み方は目的に応じて速読や精読などを選択

新指導要領に記載された指導内容は、最低限のものであり、全ての学校で取り上げる必要がある。従って、上の(1)～(4)は、育成すべき最低限の能力ということになる。ここで注意すべきは、新指導要領の指導内容が最低限のものであることが、より発展的な内容の指導を妨げるものではないということだ。以下は、新指導要領「第1章 総則」の「第5款 2 各教科・科目等の内容等の取扱い」からの引用である。

[指導] 内容の範囲や程度等を示す事項は、当該科目を履修するすべての生徒に対して指導するものとする内容の範囲や程度等を示したものであり、学校において必要がある場合には、この事項にかかわらず指導することができる。

この文言の直後には「目標や内容の趣旨を逸脱したり、生徒の負担過重になったりすることのないようにするものとする」という但し書きがあるものの、新指導要領の趣旨から逸脱しない範囲内で、育成が求められている最低限の能力以上のものを、生徒に付けさせても構わないのである。ましてや、本論が想定する学習者は大学生である。そこで、次節では、上の(1)～(4)に示した能力以外に、文学を通しての育成が期待される諸能力についても考察する。

第4節 コミュニケーション能力論が規定するリーディング力と文学

前節では、新指導要領の観点から、文学による育成が期待できる能力を4点挙げた。しかしながら、本来は、指導要領をも超えたレベルから、リーディング力と文学の関係を考える必要がある。そこで本節では、より一般的なコミュニケーション能力論の観点から、文学によって育まれるリーディング力について考察したい。

第1項 外国語教育／第二言語教育におけるコミュニケーション能力論と文学

本項では特に、外国語教育もしくは第二言語教育におけるコミュニケーション能力論と文学との関わりを扱う。この分野では様々なコミュニケーション能力論が存在するが、雑誌 *Applied Linguistics* の創刊号（第1巻、第1号）の巻頭論文中に提示された Canale and Swain (1980) の“communicative competence”は、現在に至るまで影響力を（少なくとも日本では）有し続けている。“communicative competence”とその下位能力を表1にまとめた。

表1 Canale and Swain (1980) の“communicative competence”

Communicative competence	Grammatical competence	Knowledge of lexical items
		Knowledge of rules of morphology, syntax, sentence-grammar semantics, and phonology
	Sociolinguistic competence	Sociocultural rules
		Rules of discourse
	Strategic competence	Verbal communication strategies
		Non-verbal communication strategies

表の中央の段を、上から順番に概観する。“Grammatical competence”（文法能力）は、「正確に」文を理解したり、表現したりする能力のことで、例えば、「あなたは何歳ですか？」という日本語が“How old are you?”という英語に合致することを理解する能力である。しかし、初対面の人に向かって、あるいはそうでなくとも、“How old are you?”と言うのは、文法上は正しくとも不躰であろう。それが不躰であることを理解する能力は、次の“Sociolinguistic competence”（社会言語能力）にカテゴライズされる。3つ目の“Strategic competence”は、例えば、会話においてある英単語が即座に出てこない場合、それを別の表現で言い換えたり、ジェスチャーを使って伝えたりする能力のことである。これら3つの下位能力から成る“communicative competence”は、少なくとも日本の英語教育界では、30年以上の長きにわたって大きな影響力を持ち続けている⁵⁾。その影響力の大きさは、例えば、日本で出版された英語教育学関連の入門書において、“communicative competence”がコミュニケーション能力の代表（多くの場合、同能力の唯一の例）として挙げられていることから窺える⁶⁾。文学との関連で留意すべきは、“communicative competence”が、その下位能力が示すように、特に文学によって育成される必要はないという点である。

英語教育学関連の入門書によっては、Bachman（1990）の“communicative language ability”もしくはBachman and Palmer（1996）の“language ability”も、代表的なコミュニケーション能力として挙げている。ここでは、後者のみ表2にまとめる。

表2 Bachman and Palmer（1996）の“language ability”

Language ability	Language knowledge	Organizational knowledge	Grammatical knowledge	ex. Knowledge of vocabulary
			Textual knowledge	ex. Knowledge of cohesion
		Pragmatic knowledge	Functional knowledge	ex. Knowledge of manipulative functions ex. Knowledge of imaginative functions
			Sociolinguistic knowledge	ex. Knowledge of cultural references and figures of speech
	Strategic competence			

Canale and Swain（1980）の“communicative competence”に相当するものが、Bachman and Palmer（1996）では“language ability”と呼ばれている。この“language ability”は、知識に関わる“Language knowledge”と、方略に関わる“Strategic competence”とに大別される。うち、“Language knowledge”の下位にある“Pragmatic knowledge”の中にある“Functional knowledge”に注目したい。というのも、“Functional knowledge”の例として挙げられている“Knowledge of imaginative functions”は、文学による効果的な教授が期待出来るからである。Bachman and Palmer（1996）には次のような説明がある。

Knowledge of imaginative functions enables us to use language to create an imaginary world or extend the world around us for humorous or esthetic purposes; examples include jokes and the use of figurative language and poetry.

この中にあるように、“Knowledge of imaginative functions”が“an imaginary world”や“humorous or esthetic purposes”や“figurative language”や“poetry”等と関わりがあるならば、それは確かに文学による効果的な教授が期待出来よう。

第2節で触れた通り、Brown (1994) は読解力を計14の下位能力に分類している。うち、12番目に挙げられている「文字通りの意味と暗示的な意味とを見分ける」(12. Distinguish between literal and implied meanings.) 能力は、文学による効果的な育成が期待出来る。ただ、この能力に関し、Brown (1994) はこれ以上の説明を何もしていない。

第2項 Jacobson によるコミュニケーション論と文学

ここまでは外国語教育、第二言語教育の視点から、コミュニケーション能力と文学との関わりを論じてきた。本項では、外国語／第二言語教育を前提としたものではないが、Jacobson (1960) のコミュニケーション論に触れたい。周知の通り、Jacobson によると、コミュニケーションは6つの構成要素から成り立つ (図1)。

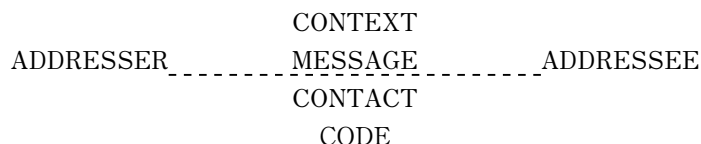


図1 Jacobson (1960) のコミュニケーションの6つの構成要素

これら6つの要素のうち、文学との関わりが深いのは“message”であり、それが焦点化された言語では「詩的機能」(poetic function) が特に働くと Jacobson は指摘した。“message”は使用される言語表現そのものであり、それによって表現される内容が“context”である。従って本論では、“message”には「表現」、 “context”には「内容」という訳語をあてたい。同じ内容を伝えるためにも、様々な表現を使うことが出来る。例えば、「僕の恋人はとても美しい」という内容を伝えるために、“My girlfriend is very pretty.” といった「陳腐な」表現を使っても、詩人 R. Burns よろしく “My love is like a red, red rose.” といった「気の利いた」(キザな?) 表現を使ってもよい。そして、Jacobson が「言語は、その全ての機能において論じられないといけない」(Language must be investigated in all the variety of its functions.) と主張しているように、“poetic function” (もしくは “message”) はコミュニケーションにとって欠くべからざる機能・要素なのである。この機能・要素の学習を、外国語／第二言語教育にも取り入れるべきではなからうか。

Jacobson (1960) からの次の引用 (特に下線部) にあるように、「詩的機能を詩のみに限定しようとするのは (中略) 過度の単純化である」と言える。

[The poetic] function cannot be productively studied out of touch with the general

problems of language, and, on the other hand, the scrutiny of language requires a thorough consideration of its poetic function. Any attempt to reduce the sphere of poetic function to poetry or to confine poetry to poetic function would be a delusive oversimplification. (下線筆者)

「詩的機能」は、詩以外の文学ジャンルはもちろんのこと、文学以外の言語にも関係してくるのである。このことを言語教育にあてはめてみると、「詩的機能」の学習に、必ずしも文学教材を使う必要はないということになる。しかし、「詩的機能」がもっとも働いている言語はやはり文学であろう。とすれば、同機能は、文学によってこそ効果的に学べるということになる。

第3項 文学によって育まれるべきリーディング力—新指導要領を超えた観点から—

以上本節では、指導要領を超えたレベルから、コミュニケーションと文学との関わりを考察した。次の3点が、文学による効果的な学習が期待される知識・能力等である。

- ・ Bachman and Palmer (1996) の “Knowledge of imaginative functions”
- ・ Brown (1994) の “Distinguish between literal and implied meanings.”
- ・ Jakobson (1960) の “poetic function” (および “message” が焦点化された言語)

これら3点のそれぞれを、本論が想定する英語学習者（日本の大学の教養課程で英語を学んでいる、特に文学を専門とはしない学部1, 2年生）が付けるべき能力として書き換えたものが次の(5)~(7)である。第3節第4項でまとめた(1)~(4)の能力に続くものとして捉えられたい。

- (5) 文学を通し、ユーモアや比喩表現について理解する。
- (6) 文学を通し、字義どおりの意味と暗示された意味との違いに気付く。
- (7) 文学を通し、内容を伝える表現そのものに着目する。

繰り返しになるが、(1)~(7)の計7点の能力は、もちろん文学以外の教材でも育成することが出来る。しかし、文学によってこそ効果的に育まれることが期待される。

第5節 おわりに：教材例と教授法例

本論ではここまで、文学による効果的な育成が期待される能力について考察してきた。最後に、それらの能力を付けるための教材と教授法を例示する。

教材には、ルイス・キャロルによる『不思議の国のアリス』の原文を選択したい。同作品は、日本を含むあらゆる国において人気が高く、ディズニー映画をはじめ、何度となく映像化もされてきた。また、日本の高校の英語教科書にも『不思議の国のアリス』はよく取り上げられてきた。本論が想定する学習者である日本の大学1, 2年生にとっては、内容面において比較的なじみ易い教材になり得ると判断した。文学は往々にしてその言語面の難解さが問題となる。しかし、下の表3に引用した箇所における『不思議の国のアリス』の原文のリーダビリティは、Flesch-Kincaid Reading Ease でスコア91, Flesch-Kincaid Grade Level でグレード3.9であった。日本のほとんどの大学1, 2年生にとって問題のないレベルであろう。

文学教材を扱う際、教師はまず、いわゆる文法訳読式の教授法を選択するかもしれない。同教授法を必ずしも批判するものではないが、本論としては、発問によって学習者の読みを促す教授法を提案したい。文学による育成が期待される上記(1)～(7)の能力を、発問を通して向上させるのである。以下に、教材として使用する原文『不思議の国のアリス』第6章の本文と、それを読み進めるための発問例を示す。なお、それぞれの発問がどの能力に対応しているのかも表中に示した。

表3 『不思議の国のアリス』第6章を用いた教材例・発問例

指示文：次の英語は、ルイス・キャロル作『不思議の国のアリス』第6章の原文からの引用です。この中で少女アリスは、不思議な猫である「チェシャ猫」と話をしています。引用文を読んで、下の問1～6に答えなさい。		
<p>“All right,” said the Cheshire-Cat; and this time it vanished quite slowly, beginning with the end of the tail, and ending with the grin, which remained some time after the rest of it had gone.</p> <p>“Well! I’ve often seen a cat without a grin,” thought Alice; “but a grin without a cat! It’s the most curious thing I ever saw in all my life!”</p>		
問1	本文に出てくるチェシャ猫は絶えず“grin”していますが、それはどのような「笑い」でしょうか。それがわかるように“grin”を日本語に訳して下さい。	能力(7)
問2	“grin”を浮かべたチェシャ猫の顔を描いてみて下さい。	能力(2)
問3	本文中の“grin”は名詞として使われていますが、動詞で使われることもあります。“grin”のほかに「笑う」という意味を持った動詞を英語一語で出来るだけたくさん挙げて下さい。	能力(7)
問4	成句としての“grin like a Cheshire cat”の意味を辞書で調べて下さい。	能力(5)
問5	本文から、アリスのどのような感情が読み取れますか。	能力(1)
問6	最後の2行を、アリスの気持ちを汲みながら音読して下さい。	能力(4)

学習者に求められるのは、当面の間は教師からの発問に答えることのみであろう。続いて、学習者がある程度は発問に慣れてきた段階で、教師はどの発問がいかなる能力に対応するのかを学習者に明示することが考えられる。最終的には、学習者は自らが作成した発問に自らが答えるかたちで文学を読み進めることが期待される。その時、学習者は文学の「自立した読み手」となり得よう。

*本論は、科研費助成事業の学術研究助成基金助成金（基盤研究（C））研究課題番号23520305「英語教育材料としての英文学の可能性を探る研究」（研究代表者：小野 章）の補助を受けて執筆された。

注

- 1 英語教育学を専門とする学部生にとっての入門書のひとつである『新・英語科教育の研究』（大修館書店）の88頁にも次のような記述がある。「読むための教材について考えるときは、順序として、まず何のために読むのかを確認し、次にその目的を達成するのに最適な教材は何かを考えることになる。」
- 2 リーディング力全体をひとつの能力と考え、それ以上不可分とする見方（holistic view）も

ある。本論は、それとは逆の見方 (component view) をするものである。

- 3 ESLは English as a Second Language の略。一方、本論が英語学習者として想定しているのは日本人であり、彼／彼女らは EFL (English as a Foreign Language) 学習者である。しかし、本論では、リーディング力の下位能力を考える上で、Brown (1994) の論を EFL 学習者にもあてはめることにした。
- 4 新指導要領の「物語」には小説等は含まれないと思われる。というのも、英語科 (本論の対象は外国語科) に属する英語の科目「英語理解」に関し、『解説』では、次のように物語が小説等とは別に扱われているからである。「〔鑑賞〕では、物語、伝記、小説、随筆、論文、詩、劇、映画などの様々な形態の作品を扱うことになるが、いたずらに高度な題材を求めることなく (以下略)。」
- 5 柳瀬 (2013) も次のように指摘している。「コミュニケーションの理論的理解の深まりは思うように進んでいない。現在入手できる最良の SLA 入門書でさえ、コミュニケーション能力論として80年代前半の Canale and Swain などの論をあげるにとどまっており、90年代の Bachman らのモデルさえ登場しない。」
- 6 Canale and Swain (1980) の “communicative competence” をコミュニケーション能力の代表 (もしくは、同能力の唯一の例) として挙げている入門書を4点、コミュニケーション能力を扱っている該当ページとともに記しておく。
 - (1) 『新・英語科教育の研究』(1994) (大修館書店) pp. 165-67
 - (2) 『新しい英語科教育法』(2002) (現代教育社) pp. 27-30
 - (3) 『現代の英語科教育法』(2003) (英宝社) pp. 8-10
 - (4) 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』(2006) (大修館書店) pp. 167-68

引用文献

- Bachman, L. (1990). *Fundamental considerations in language testing*. Oxford: OUP.
- Bachman, L., & Palmer, A. (1996). *Language testing in practice*. Oxford: OUP.
- Brown, H. D. (1994). *Teaching by principles: An interactive approach to language pedagogy*. NJ: Prentice Hall.
- Canale, M., & Swain, M. (1980). Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing. *Applied Linguistics*, Vol.1, No.1, 1-47.
- Carroll, L. (1998). *Alice's Adventures in Wonderland*. In Hugh Haughton (Ed.), *Alice's Adventures in Wonderland and Through the Looking-Glass* (pp. 9-110). London: Penguin Classics. (Original work published 1865)
- Jakobson, R. (1960). Linguistics and poetics. In Sebok, T.A. (Ed.), *Style in Language*.
- 文部科学省 (2009). 『高等学校学習指導要領 外国語編』
- 江利川春雄 (1998). 「教科書にみる文学作品の変遷史」『英語教育』47(2), 8-10.
- (2004). 「英語教科書から消えた文学」『英語教育』53(8), 15-18.
- 小澤浩美・幡山秀明 (2010). 「英語教育と文学的教材 [11] —学習指導要領と文学的教材—」『宇都宮大学教育学部 教育実践総合センター紀要』第33号, 315-20.
- 柳瀬陽介 (2013). 「コミュニケーションに関するヤーコブソン・モデルの展開—英語教育研究の刷新のために—」『中部地区英語教育学会紀要』第42号. (投稿中)

ABSTRACT

English Reading Skills to Be Developed through Literary Texts: From the Viewpoint of the New Course of Study and Theories of Communication Skills

Akira ONO

The Graduate School of Education, Hiroshima University

The 65th meeting of The English Literary Society of Japan, Chugoku-Shikoku Branch was held at Kochi University on 27-28 October 2012. On the second day a symposium was held under the title, "What can literary scholars do when methods of teaching reading are getting diversified?" I took part in it as one of the five lecturers and I spoke on the reading skills to be developed through literary texts. This paper is based on what I spoke then.

The target learners are 1st or 2nd year Japanese university students who study English not as their major but as one of the liberal arts subjects. To identify the communication skills that the target learners, who have just graduated from senior high school, are expected to develop, I first examined the new course of study for senior high schools to be implemented in April 2013. The subject area, "Foreign Languages," consists of seven subjects. I paid particular attention to the two subjects, "English Communication I" (EC I) and "English Communication II" (EC II), because they are taught in most of the senior high schools. Among the reading skills that EC I and EC II require students to get, I insist the following four skills can be more effectively developed by literary texts than by non-literary ones (such as an explanation on cats' habits.)

1. Understand characters' words, acts, or feelings and the reasons for them from the context by reading stories, etc.
2. Enjoy the pleasure of reading by reading stories, etc.
3. Compare the writer's experiences and opinions with the reader's own by reading essays, etc.
4. Recite or read passages aloud so that the meaning of the content is expressed.

The four skills seen above are intended for senior high school students. The target learners in this paper (i.e. university students) are expected to use more advanced skills, so I referred to some theories of communication skills. Canale and Swain's theory of "communicative competence" has been the most influential one in Japan for more than 30 years. The problem is that "communicative competence" seems to be irrelevant to literature reading. The skills that might be effectively developed through literary texts are to be found in Bachman and Palmer (1996), Brown (1994), and Jacobson (1960), that is, "knowledge of imaginative functions," ability to "distinguish between literal and implied meanings," and due attention to "message" respectively. Modifying these skills to make them more acceptable to

our target learners, I would like to propose the following three skills in addition to the aforementioned four skills.

5. Understand humorous or figurative language by reading literary texts.
6. Distinguish between literal and implied meanings by reading literary texts.
7. By reading literary texts pay due attention to expression itself as well as the content expressed.

The seven skills discussed in this paper can be developed through non-literary texts as well. My claim is, however, that the skills are more effectively dealt with through literary texts.